慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働貴族の古典的時代におけるフリントガラス製造工(その2)
Sub Title	The flint glass makers in the classic age of the labour aristocracy, 1850-1880 (2)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.5 (1977. 10) ,p.518(22)- 535(39)
JaLC DOI	10.14991/001.19771001-0022
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771001-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働貴族の古典的時代におけるフリントガラス製造工

（その２）

松　村　高　夫

第一章　フリントガラス産業とフリントガラス製造工

第一節　1850年以前におけるガラス産業の発展

ガラスは，物性論的には，極端に粘度の高い液体，すなわち過冷却液体である。それはシリカとアルカリが一定量の多数の原料を高温で溶解したのち，冷却することによってえられる透明度の高い物体で，外見は固体であるが，固体特有の結晶構造をもたない。シリカは天然に存在する珪砂が使用されたが，そのなかの鉄分含有量が，ガラスの透明度に大きく影響した。アルカリは，歴史的には，木の灰または焼いた海草からえられたが，前者がカリガラス，後者がソーダガラスである。原料中のアルカリは，他の原料の溶解促進剤として作用するので，その量は融点を規定する。ソーダガラスの方が，ヨリ広い温度巾で可塑的状態にあるが故に，ヨリ加工しやすいという特徴をもっていた。鉛が追加的溶解促進剤として加えられたが，それが鉛ガラスである。わたくしが研究対象とするフリントガラスとはこの鉛ガラスのことであり，現在では，クリスタルガラスと呼ばれているものである。それは，タンブラー，ゴブレット，食器類，シャンデリアのような無色透明のガラスにたいする一般的呼称である。

フリントガラスの製造方法は偶然的な発見によるものといわれ，その起源は，1615年，ガラス製造用燃料として木材を使用することが政府によって禁止されたことにさかのぼる。(1) 木炭に代って石炭が採用されたことにより，石炭から発生する煙が溶解中の原料と接触してガラスの純度を低下するのを防止するため，原料溶解用ポットに蓋がつけられた。そして，このような open pot から closed pot への転換にともない，ポット内の原料を攪拌するのが困難になったので，強力な溶解剤として鉛が添加された。鉛は，それ以前にはみられなかった光沢をガラスにあたえる結果を生み，ここに透明度の高いフリントガラスが製造されたのである。

木炭から石炭への燃料の転換は，ガラス産業の地理的分布に影響をあたえた。木炭を使用して繁

注(1)　1615年5月23日のジェイムス一世の法令。Albert Hartshorne, *Old English Glasses*, 1897, p. 413. による。

栄していたSurreyとSussexではガラス産業は急速に衰退し[2]，代って，Londonに加えて[3]，二つの中心地が出現した。Newcastle (upon Tyne) とStourbridgeである。すなわち，1616年にRobert MansellはLondonからNewcastleに移住し[4]，1612年にPaul TyzackがStourbridgeに移住したのである[5]。両地域とも豊富な炭田を背後にもっていたのだが，それに加えて，Newcastleではタイン河口の良港の存在が，また，Stourbridgeでは良質の粘土の産出が，ガラス産業の定着に有利な条件として作用した。梱包されたガラス製品はNewcastleからLondonへ石炭船で運ばれ，帰路にはその荷船はKing's Lynnに寄港し，ガラス製造用の良質の珪砂を持ち帰ったのである。また，Stour Valleyの炭層下に豊富に存在する粘土は，ガラス原料溶解用ポットの製造に最適であり[6]，Stourbridgeの地方新聞が，「この製品（ポット）がさらされる途方もない熱に耐えられる他の物質は知られていない[7]」と記したものであった。その粘土はStourbridgeで使用されただけでなく，イングランドの他のガラス製造地にも送られ使用された。後年には，アメリカ，フランス，ドイツにもポット製造用として輸出されている[8]。

17世紀末には，ガラス産業はLondon, Stourbridge, BristolおよびNewcastleに集中していた。Bristolは17世紀中葉よりガラス製造を開始したが[9]，近隣のKingswood炭田とBristol港が存在したこと，さらに，ビールやサイダーの類の地方産業がガラスビンにたいする大きな需要を生

注(2) W. E. S. Turner, The British Glass Industry: Its Development and Outlook, in *Journal of the Society of Glass Technology*, vol. 6, 1922, p. 114. 最初のガラス製造の書面による許可は，すでに1226年にChiddingfoldのWealden Villageでなされた。(H. J. Powell, *Glass-Making in England*, Cambridge, 1923, p. 11.) また，G. H. Kenyon, *The Glass Industry of the Weald*, 1967. および，E. S. Godfrey, *The Development of English Glassmaking, 1560—1640*, 1976. が，初期のガラス産業について詳しい。

(3) 1549年，8名のヴェネチアのガラス工がMuranoよりイングランドに移住し，Londonに定住した。1575年Giacomo Verzeliniはイングランドで21年間ヴェネチアガラスを製造することを許可された。17世紀初頭，Lorraine出身のRobert MansellがLondonでガラス工場を経営したが，この工場は，以前Verzeliniのものであった。(H. J. Powell, *op. cit.*, p. 126.)

(4) Robert MansellはNewcastleのOuseburnに工場を設立し，1618年に石炭を使用してガラス製造をおこなう特許をえた。(*The Victoria History of the County*, Durham, vol. II, 1907, p. 309. および，James Clephan, Manufacture of Glass in England : Rise of the Art on the Tyne, in *Archaeologia Aeliana*, new ser., vol. 8, 1880, pp. 180-226.)

(5) D. R. Guttery, *From Broad-Glass to Cut Crystal : A History of the Stourbridge Glass Industry*, 1956, p. 5. Stourbridgeのガラス産業の起源にかんしては，D. N. Sandilands, The Early History of Glass-Making in the Stourbridge District, in *Journal of the Society of Glass Technology*, vol. 15, 1931, pp. 219-27. および，*Brierley Hill Advertiser*, July 20, 1867. を参照。

(6) Stourbridgeのガラスポット用粘土の採掘許可は，1566年に初めてあたえられた。(George Harrison, Stourbridge Fire Clay, in S. Timmins (ed.), *Birmingham and the Midland Hardware District*, 1866, p. 133.) 粘土は地表より約150フィート下，石炭層より45フィート下にあり，ほぼ200エーカーにおよんでいるが，最上質のものは，ほぼ48エーカーである。(R. Simms, *Contributions towards a History of Glass Making and Glass Makers in Staffordshire*, Wolverhampton, 1894, p. 10.)

(7) *Brierley Hill Advertiser*, May 18 1867.

(8) *The Victoria History of the County*, Worcester, 1906, vol. II, p. 281.

(9) Bristolでは，ガラス製造は1685年にEdwin Dagmaによって最初におこなわれた。F. Buckley, The Early Glasshouses of Bristol, in *Journal of the Society of Glass Technology*, vol. 9, 1925, pp. 36-61. を参照。

みだしたことがBristolにガラス産業をひきつけたのである。これらの四地域の他にも，ガラス工場がSwansea, Nottingham, Yarmouth, King's Lynn, Isle of Wightなどの分散した地域に多数存在したが，18世紀になると，それらは，しだいに特定の地域に集中するようになった。1696年と1784年のあいだに，西ミッドランドのガラス工場数は増加し，イングランドとウェイルズのガラス工場総数に占める割合も，22.3%から25.0%へと増加し，ガラス工場がもっとも集中する地域となった。同じ期間に，Londonではその割合が29.7%から20.0%へと減少し，全国で第2位の位置に転落している。一方，Newcastleでは，11.7%から15.0%へと増加し，Bristolでは，17.0%から15.0%へと減少した。[10] Newcastle地方では，18世紀をとうしてクラウンガラスに生産を特化することによって繁栄し，世紀末には，「Newcastleでは，石炭に次いで繁栄する産業は鉄ではなくガラスであった」[11]といわれるほどであった。Stourbridgeでは，その頃までにブロードガラスよりもフリントガラスとガラスビンを重点的に生産するようになっており，一方，Bristolでは，Kingswoodの炭田から充分な石炭がガラス産業に供給されえなくなったことから，ガラス産業は斜陽化していたが，Bristolの南西8マイルにあるNailseaでガラス産業が興起している。

注目すべきことは，19世紀中葉までにガラス産業の地理的再分布が完了したことである。Newcastleでは，ほぼ1830年以降，ガラス産業は徐々に停滞の方向に向っていた。その地域が享受していた水運という利点が，徐々に失われつつあったことが停滞の主要な原因であった。その頃までは，Newcastleを出港した石炭船がオランダなど大陸からの帰路に，船の吃水の釣合いを保たせるために船底に積むいわゆる脚荷（あしに）として，ガラスの原料を積んで持ちかえっていたのだが，鉄製石炭船の発達はその必要性を失わせ，Newcastleのガラス原料の輸入が減少したのである。[12] 同時に，生産されるガラスの種類にも大きな転換が生じている。1830年以降，それまでのクラウンガラスがシートガラスに代替した。クラウンガラスの中心部に生じるbull's eyesとよばれる小円塊が，窓ガラスの大きさを制限していたが，フランスとドイツのシートガラス製法は，bull's eyesなしの，ヨリ大きなガラスの生産を可能にし，しかも低価格で生産できたので，きわめてドラスティックにクラウンガラスを市場から駆逐したのである。その駆逐を促進したのが，ある時期には原価格の3倍も課せられた，クラウンガラスにたいする重税であった。[13] こうして，1850年代中頃にNewcastle地方に残ったクラウンガラス工場はわずか一工場となり，1860年代初めにはその工場も閉鎖され

注(10) 1696年の数値はJohn Houghton, *A Collection for Improvement of Husbandry and Trade*, 1692に，また，1784年の数値は*Bailey's Directory* of 1784, vol. I-IV. にもとずいている。百分率は，C. M. Brown, Changes in the Location of the British Glass Industry since about 1833, Ph. D. thesis, University of London, 1970, p. 44, 51. で計算されているものを引用した。

(11) Rev. John Vaillie, *An Impartial History of the Town and County of Newcastle upon Tyne and its Vicinity*, 1801. (S. Middlebrook, *Newcastle upon Tyne, Its Growth and Achievement*, Newcastle, 1950, p. 141 に引用されたもの。)

(12) Ursula Ridley, *The History of Glass Making on the Tyne and Wear*, (Typescript) p. 5.

(13) G. B. Hodgson, *The Borough of South Shields*, Newcastle-upon-Tyne, 1903, p. 362.

た。[14] 一方，シートガラスは，1837年にCookson's Works で製造開始されたが，この工場は，その工程を熟知しているフランスのガラス工を採用することにより，その製造を可能としたものである。[15] そして，クラウンガラスの衰退とは対照的に，シートガラスはその後，市場を拡大した。1840年代になると，Sunderland の James Hartley が rolled プレイトガラスを発明し，[16] その新技術は，長年採用されてきた blown プレイトガラスにとって代った。この種のガラスは耐久性があり，透明で，しかも安価に生産されたので，とくに天窓やガラス天井に適し，工場や停車場などの建築が増加するにともない，大きな需要があったからである。[17]

Newcastle のガラス製造業者の競争相手は，St. Helens の同業者であった。ランカシャーの炭田と地元で採取される珪砂は，St. Helens がプレイトガラス産業の中心地となるのに有利であった。衰退しつつある Bristol のガラス産業から多数の熟練工を雇用して，急速度に発展しはじめ，19世紀初頭には，St. Helens は Newcastle に次いで二番目のガラス税多額納入者となった。St. Helens のガラス工場でもっとも大規模な企業は，かの Pilkington である。[18] ここで，Newcastle でもランカシャーでも，19世紀前半にはフリントガラス部門はけっして繁栄していなかったことに注意するべきだろう。1830年代に，Newcastle ではわずかに5つのフリントガラス工場があったにすぎず，[19] また，ランカシャーでも，少数のフリントガラス工場が，Bolton, St. Helens, Warrington および Manchester に散在していたにすぎなかった。

フリントガラス製造は，19世紀中葉までに，圧倒的にミッドランドに集中し，なかでも Stourbridge と Birmingham が二大中心地となっている。Birmingham のガラス産業は，他の地域より若干遅れて18世紀後半に，玩具，ボタン，ガラス研磨のような小規模生産として出発した。[20] だが，

注(14) 残存した工場は，R. W. Swinburne & Co. である。(T. Salmon, *South Shields, Past, Present, and Future*, South Shields, 1856, p. 21.) Swinburne 自身，1864年に，「イングランドの技術発生地に，いまや窓ガラス製造の足跡すらない」と書いた。(R. W. Swinburne, The Manufacture of Glass, in W. Armstrong and others (ed.), *The Industrial Resources of the District of the Three Northern Rivers*, 1864, p. 199.)

(15) G. B. Hodgson, *op. cit.*, p. 362. および，*Penny Magazine*, vol. XIII, June 1844, p. 256.

(16) W. Waples, *Glass-Making and Glazing*, 1952, p. 4.

(17) 1860年代初期に，Sunderland の James Hartley and Co. の生産高は，イングランドで消費された，イングランド製のシートガラスの3分の1を占め，イングランド製のシートガラスの総額の約4分の1を占めていた。(R. W. Swinburne, *op. cit.*, p. 200.)

(18) Pilkington は，1773年に設立されたBritish Plate Glass Company に起源をもっている。その社史にかんしては，T. C. Barker, *Pilkington Brothers and the Glass Industry*, 1960, を参照されたい。

(19) H. J. Powell, *op. cit.*, p. 96. Powell は，「Newcastle が，かつて精巧なフリントガラスの食器生産で注目すべき地方であったか否かは疑わしい」と書いている。(*Ibid.*)

(20) Birmingham では，Isaac Hawkers が Edgbaston Street に小規模のガラス工場を設立する1785年まで，ガラスが製造されたことはなかった。(S. Timmins, *op. cit.*, p. 527, H. J. Powell, *op. cit.*, p. 104, および *The Victoria History of the County*, Warwick, vol. II, 1908, p. 244.) しかし，G. C. Allen は「食器にかんするかぎり，その産業（ガラス産業）は1750年頃 Stourbridge から（Birmingham に）ひろがったようにみえる」と書いている。(G. C. Allen, *The Industrial Development of Birmingham and the Black Country, 1800--1927*, 1929, p. 19.)

18世紀末から19世紀初頭にかけてガラス工場が多数設立され，比較的短期間のうちに大工場へと成長するものもあり，Stourbridge と競争するようになった。[21] 1830年代には，Birmingham の5つのガラス会社の生産高が，すでに Stourbridge の 11 の会社のそれを上廻るほどになっていた。[22] F. & C. Osler Co.[23] と Lloyd and Summerfields Co. は Birmingham の代表的フリントガラス会社である。1851年には，Birmingham に19のガラス製造業者，5つのシャンデリア製造業者のほかに，12のガラスボタン製造業者と20のガラス玩具製造業者がいたと記録されており，[24] また，1850年には，Stourbridge に11のガラス工場があり，そのうち9工場がフリントガラスを生産しており，残り2工場がガラスビンを製造していたと記録されているので，[25] 19世紀中葉には，Stourbridge のほうが，Birmingham より，フリントガラスに生産を特化していたということができよう。

一方，London のガラス産業は，19世紀にはいるとさらに相対的重要度を低下させ，大部分はガラス製造を中止して，ガラスの販売や装飾へと業務の転換をはかった。だが，そうした London の停滞傾向のなかで，2つのフリントガラス工場——White FriarsWorks および Falcon Works——が，あるときは大陸までででかけて熟練職人を確保したり，才能あるデザイナーを登用したり，また，ガラス生産の新技術を導入したりして，安定的な生産を維持したことは注目されねばならない。[26] スコットランドでは，Edinburgh の有名な Holyrood Glass Works が19世紀初頭に創業を開始しており，19世紀をとうしてユニークなデザインをもつ良質なフリントガラス生産地として高い評価をえ，安定した市場を確保した。[27] このように，London や Edinburgh などの地域では，

(21) 1789年に Johnson と Shakespeare が共同でガラス工場を設立し，1801年に，後者の息子 William Shakespeare が Soho and Vesta Glass Works を設立した。1807年には Thomas Osler がやはりガラス工場を設立している。R. K. Dent は，こう書いている。「Hawker 氏が1785年に Birmingham でガラスを製造しようとする最初の試みをなす以前には，ミッドランドの諸カウンティーは Stourbridge から（ガラスを）供給されていたが，18世紀末以前に，Birmingham のガラスは Stourbridge や近隣の町のガラスと激しく競争しており，その製造は急速に重要な地方産業になりつつあった」。(Robert Kirkup Dent, *Old and New Birmingham*, Birmingham, 1879, p. 342.)

(22) W. H. B. Court, *The Rise of the Midland Industries, 1600—1938*, 1938, p. 224.

(23) Osler の工場については，British Industries : III, Glass, in *Tinsley's Magazine*, August 1899, pp. 343-53. および *Birmingham and General Advertiser*, August 24 1848. に詳細に記述されている。

(24) *Birmingham Mercury*, May 17 1851.

(25) *Brierley Hill Advertiser*, July 13 1867. Stourbridgeのガラス産業にかんしては，D. R. Guttery, *op. cit.*, の他にH. J. Haden, *The Stourbridge Glass Industry in the 19th Century*, Black Country Society, 1971, および，H. W. Woodward, The Glass Industry of the Stourbridge District, in *West Midland Studies*, vol. 8, 1976, pp. 36-42. を参照。

(26) Whitefriars Works は，1680年にWilliam Davis により設立され，のちに William Powell の手に入ったものだが，Powell は職人やデザイナーを熱心に探し雇用した。また1693年，Francis Jackson により Blackfriars に設立された Falcon Works は，一世紀後，Pellatt 家の所有となった。Apsley Pellatt もまた，ガラス生産の新技術を採用するのに熱心で，その目的のため大陸にでかけている。

(27) Holyrood Glass Works の起源は，1812年に William Ford によって設立された Caledonian Glass Works である。Edinburgh and Leith Flint Glassworks が Alexander Jenkinson によって設立されたのが1864年。

Stourbridge のフリントガラスとの市場競争に耐えうるために，その地域の独自性をもつガラス製品の製造が要求されたのであり，これに対応できた地域では，急成長こそみられなかったが，安定的な生産を維持することができたのである。ヨークシャーの小都市では事情は異なっていた。そこでは，19世紀中葉にガラスビン工場が群生したが，そのなかには，薬ビンとして使用されるフリントガラスビン工場も含まれていた。[28] これらの工場は，富裕な労働者が蓄積した自己資金で設立した工場として，同時代人たちにしられていたものである。[29]

アイルランドのガラス産業は，イングランドやスコットランドのそれとは異なった発展経路をたどった。アイルランドで最初にガラス工場を設立したのは Penrose であり，1783年，Waterford においてであった。かれは，Stourbridge から熟練ガラス製造工を移入して生産を開始したが，[30] 多くの工場が，Penrose につづいて設立され，その高い技術はアイルランドのカットガラス製法として世界的評価を受けるにいたった。アイルランドのガラス工場は石炭を南ウェイルズから確保し，原料溶解用ポットの粒土は Stourbridge からえていた。[31] だが，こうした繁栄は，1825年のアイルランドのガラスへの重税によって中止を余儀なくされ，以後，急速に衰退しはじめる。[32] 1825年にアイルランドにあった11のガラス工場は，1852年にはわずか3工場（2つはDublinに，1つはBelfast）となった。[33] Waterford のガラス工場は1851年に閉鎖されており，失業したガラス工が Belfast へ移住した。そこではガラス産業はなお1870年までかろうじて存在した。そして，衰退していくアイルランドからガラス製造工が，こんどは逆に Stourbridge に移住したのである。

第二節　19世紀第3・四半期におけるガラス産業

19世紀第3・四半期のフリントガラス産業の発展には，三つの主要な特徴がある。その第一は，

以後 Ford と Jenkinson は，Edinburgh のフリントガラス生産を競う両雄となった。

注(28) ヨークシャーのガラスビン産業の歴史については，David Brundage, The Glass Bottle Makers of Yorkshire and the Lock-Out of 1893, M. A. thesis, University of Warwick, 1976, Chapter I (pp. 1-31.) 参照。

(29) E. J. Hobsbawm, The Labour Aristocracy in Nineteenth-Century Britain, in *Labouring Men*, 1964, p. 296.

(30) D. A. Chart, *An Economic History of Ireland*, Dublin, 1920, p. 86. D. N. Sandilands は，1785年に Stourbridge のガラス製造工 Hill が，「ウースター州でかれがえることのできた最良の労働者の一組とともに，アイルランドに移住した」と指摘している。(D. N. Sandilands, The Early History of Glass Making in the Stourbridge District, *op. cit.*, p. 227.)

(31) M. S. Dudley Westropp, *Irish Glass*, 1920, p. 171, 176.

(32) 1815年に Cork に Daniel Foley により設立された Waterloo Glass House Co. は，100名以上の従業員を雇用し，最上質のフリントガラスを生産していたが，1835年に閉鎖された。1818年に，同じく Cork に設立された Terrace Glass Works は，1830年代に約40名のガラス研磨工を雇用し，燭台やランプや食器を製造していたが，1841年に Cork の最後のガラス工場となった。(E. N. Enville, *English and Irish Cut Glass, 1750-1950*, 1953, p. 62.)

(33) M. S. Dudley Westropp, *op. cit.*, p. 142.

フリントガラス産業は，他のガラス産業諸部門がたどったのと同様の黄金時代をこの時期に経験したことである。たしかに，この期の繁栄は，フリントガラス製造工が労働貴族として存在するための必要条件を形成した。第二の特徴は，19世紀中葉までに完了した，フリントガラス産業の地理的再分布の類型が，この第3・四半期に固定化したことであり，ミッドランドの，とくにStourbridgeのフリントガラス製造の中心地としての比重がいっそう大きくなったことである。だが，Newcastle 地方を中心とする pressed ガラスの出現は，19世紀中葉以降に生じた新しい特徴として看過することはできない。pressed ガラス生産は，ヨリ低い技術で可能だったため，後に詳しくのべるように，伝統的な熟練を要する blown ガラスの製造業者と製造工に脅威をあたえた。第三の特徴として，フリントガラス産業には，生産工程に急激な変化を生じさせる新技術はこの期も導入されず，pressed ガラスのばあいを別とすれば，数世紀間つづいてきた伝統的技術に依存しつづけたことがあげられよう。工場の規模は依然として小さいままであったし，4人1組からなる「チェアー」"Chair" が，あいかわらず労働の最小基本単位として機能しつづけた。すべてこれらの伝統的要因は，旧式の職人意識が存続するための条件となったことは，いうまでもない。

1845年におこなわれたガラス税の最終的撤廃は，疑いもなく，その後のガラス生産の急速な拡大のための前提条件をなした。ガラスにたいする重税が，ブリテンのガラス産業の発達を阻害してきたことは，よくしられている。それは最初，1695年に課せられ，間もなく1698年に撤廃されたが，1745年に再び課せられ，以後1845年までつづいたのである。(34) 撤廃の前年，1844年に，*Penny Magazine* は，この「嫌悪すべき」(obnoxious) 税について，つぎのように書いている。

「その規制はひじょうに拘束力があったので，製造業者は大規模な新しい試みをすることもできないし，何らかの改良をほどこすことも，多少の小さな改良を除けば，できないのである。……すべての炉，ポット，オヴン，および倉庫は登録されねばならない。すべての『チャージ』，すなわち原料の充塡は，役人の統制のもとにおこなわれなければならない。アニーリング（焼なまし用）・オヴンからとりだすのは，すべて決められた時間でなければならない。ポットの製造そのものから販売のためのガラス製品の梱包にいたるまで，すべてが議会の法律による所定の方式にしたがってなされている。(35)」

1840年代後半の一般的経済不況ののち，ガラス産業は繁栄期に入る。1851年に London で開催された大博覧会が，この繁栄の刺戟となったことは否定できない。クリスタルパレス建造のためのガラスは，rolled プレイトガラスの生産を直接的に拡大したし，(36) また，クリスタルパレス内に展示

注(34) ガラス税については，H. J. Powell, *op. cit.*, pp. 153-7. および D. N. Sandilands, The Last Fifty Years of the Excise Duty on Glass, in *Journal of the Society of Glass Technology*, vol. 15, 1931, pp. 231-45 参照。

(35) A Day at a Glass Factory, in *Penny Magazine*, vol. XIII, June 1844, p. 256.

(36) クリスタルパレスのプレイトガラスは，Hartleys, Chance, および Pilkingtons の三社が生産した。「James

されたフリントガラスは，ブリテンの高い技術水準を誇示することになった。そこには18のフリントガラス製造業者が製品を展示し，「真に類まれな」(truly extraordinary)[37]ものという讃辞をえたが，なかでも，Birmingham の Osler の工場が出品したシャンデリアへの讃辞は最高のものであった。Elihu Burritt は，1868年に，こう書いている。「あの，はじめてのクリスタルパレスに展示されたものをみた，さまざまな国の多数の人々が，もっとも印象的で魅力的で，もっとも記憶に残ったものについて，もしも投票をしたならば，大多数の人々は Osler 出品の水晶の泉を選ぶだろう[38]」と。これは，フリントガラス産業の黄金時代の幕あけであった。

ここで，その後のフリントガラスの発展の推移をみるために，輸出額を検討しよう。19世紀には，生産額を直接示す統計は存在しなかったので，その変化を反映するものとして，輸出にかんする数値を使用することが許されよう。1850年から1884年までの5年間毎に集計された輸出額は，第1：1表に，“ガラス総計”とフリントガラスとそれぞれ別個に示されている。この表によると，50年代前期から70年代前期にかけて，フリントガラス輸出額は2.1倍になっており，“ガラス総計”では

〔表1：1〕全ガラスとフリントガラスの輸出額（1850—84年）

年	“ガラス総計”		フリントガラス		(B)/(A)
	輸出額 (A) (£1,000)	増加率 (%)	輸出額 (B) (£1,000)	増加率 (%)	(%)
1850—54	2,248	100.0	718	100.0	31.9
1855—59	2,929	130.3	896	124.8	30.5
1860—64	3,404	151.4	1,334	185.8	39.2
1865—69	4,029	179.2	1,392	193.9	34.5
1870—74	5,360	238.4	1,511	210.4	28.2
1875—79	4,378	194.8	1,316	183.1	30.1
1880—84	5,099	226.8	1,477	205.7	29.0

(資料) W. E. S. Turner, The British Glass Industry: Its Development and Outlook, *op. cit.*, p. 133. より算出。

2.38倍となっている。輸出額の増加が，輸出量の増加よりもむしろ輸出品の価格の変化によって生じたと信じる理由はないので，この期間の増加は輸出量の急増を示すとみてよいだろう。だが，1870年代まで絶えず増加する傾向にあった“ガラス総計”の輸出とは異なって，フリントガラスの輸出は，1850年代後半に停滞していることに注意する必要がある。この停滞は，1855年の不況と1858

Hartley の特許ガラスが，1851年の壮大なクリスタルパレスを可能にしたというのは正しい。」(W. Waples, *op. cit.*, p. 4.)

注(37) *Birmingham Mercury*, May 17 1851. 博覧会に出品したガラス会社の一覧表はH. J. Powell, *op. cit.*, pp. 160-1. に掲げられている。

(38) Elihu, Burritt, *Walks in the Black Country and its Green Border-Land*, 1868, p. 118. J. Ward もまた同様の讃辞をおくっている。「この会社はガラス製造の技術を現在の完璧なものにまで高めた。それは，たんに光の透明度や金属のような透明な純粋度があるだけでなく，ダイアモンドのような性質があるからであり，それは光線を吸収したよりもいっそうの輝やきをもって，眼に反射する性質である。」(J. Ward, *The World in its Workshops*, 1851, p. 132.)

—59年のフリントガラス製造工の6ヵ月にわたる大ストライキとによるものである。そして，つぎの10年間の前半には，フリントガラスの輸出は"ガラス総計"のそれよりもヨリ急速に増加している。その後1870年代中頃までフリントガラスの輸出は増加しつづけ，1873年には頂点に達し，年間輸出額は35万9千ポンドを記録している。しかし，1877年にフリントガラス産業を襲った不況は，70年代後半の輸出を減少させ，80年から84年にかけて輸出が若干増加したにもかかわらず，85年以降，再び減少した。このように，中期ヴィクトリアの経済ブームのなかで，フリントガラス産業もまた1850年以降70年代後半まで黄金時代をもったけれども，顕著な繁栄を50年代ではなく，60年代に経験したことはとくに注目する必要があろう。

しかしながら，その繁栄する60年代でさえも，外国製ガラスが，緩慢に，しかし着実に，ブリテンのガラス産業を侵食していた。[39] ベルギー製のタンブラーとワイングラスは，国内と国外の市場とで，ブリテン産を駆逐しはじめていたし，ドイツ製のガラスもまた，危険な競争者として登場してきた。その頃，ブリテンの一部のガラス製造業者や製造工は，このような外国製品との競争を脅威と感じはじめている。1868年に労働組合にかんする王立調査委員会で，ミッドランド・フリントガラス製造業者協会 Midland Flint Glass Manufacturers Association 会長の George Lloyd は，ここ数年間，ガラス産業では「利潤が減少したが，わたしはそれがすべて労働の価格（の上昇）のためであるとか，あるいは労働者が不足したためであるとは考えない。なぜなら，外国との競争が一つの要因だからである」[40]と証言している。また，Birmingham のガラス製造工 W. T. Swene は，1867年，パリ博覧会に技術協会から視察のため他の労働組合代表とともに派遣されたが，帰国後その協会に報告したなかで，「大陸とわが国の（ガラス）製造業者とのあいだの競争においては，前者が決定的に有利である」[41]と警告した。だが，他の大多数のガラス製造業者と製造工たちは，イギリス製フリントガラスは良質なので，外国製によって市場から駆逐されることはないだろうという素朴な確信をもっていた。たとえば，Glasgow の City Flint Glass Works の製造業者 James Couper は，1878年4月になって，こう述懐している。「数年前に，外国製ガラスが輸入されたときには，雇用者も被雇用者もともに，それは原料もすこぶる劣悪だし，形も悪いので，われわれには影響をあたえないと考えた。だが，いまや輸入された多くの製品は，原料も形もわれわれのと遜色なく，価格も低いので，国産品の販売を著しく妨げている」[42]と。たしかに，伝統的製法の固執が，外国製品との競争に勝利するための諸方策の実施を遅らせた。*Flint Glass Makers Magazine* は，

注(39) "ガラス総計"における輸出額/輸入額は，1868年以後 1.00以下になった。1850年代の平均比率は4.86，60年代は1.42，70年代は0.68，80年代は0.61であった。(W. E. S. Turner, *op. cit.*, p. 133. の数値より計算)

(40) *Royal Commission on Trade Unions*, 10th Report, 1867-68 (P. P. XXXIX), Q. 18346.

(41) *Reports of Artisans, selected by a Committee appointed by the Council of the Society of Arts to visit the Paris Universal Exhibition, 1867*, 1867, p. 144.

(42) *Capital and Labour*, April 3 1878.

1877年2月につぎのように書いた。

「数年前，雇用者たちは，外国製(ガラス)は自分たちの生産する最上質のフリントガラスに，原料の色や光沢の点で競争することができないので，外国からの侵入にたいしては安全であると考えた。しかし，色や光沢の困難さは克服されてしまい，雇用者は，多くのばあい，外国製ガラスの質がかれら自身のものと等しいということを容認している。」(43)

かくして，ガラス産業の状況は悪化し，*Brierley Hill Advertiser* が1879年には，「外国製ディカンターの完成品が，イギリスの工場で研磨に要する費用と同じか，わずかに高い程度の価格でもってミッドランド地方で大量に売られている」(44)と，記事に書いたほどであった。工場監督官が，フリントガラス産業は「外国との競争の結果，大きな被害をこうむっている。われわれの地位を維持するために大きな努力が払われている」(45)と報告したのは，1880年であった。これは，フリントガラス製造業における黄金時代の終幕だった。

以上述べたような1850年以降のフリントガラス産業の発展過程は，失業数の推移にも反映している。第1：2表が示すように，フリントガラス産業の平均年間失業率は1850年代には10%を越えたが，60年代と70年代前半には10%以下になった。失業率が10%以上を示す年は，1852年，55-56年，61-62年，68-70年，77-81年であり（付表B），いずれもガラス産業の不況の年である。とくに1877年にはじまる不況は，70年代後半の失業率を15%以上に上昇させた。1879年1月には，フリントガラス製造工友愛組合 Flint Glass Makers Friendly Society の書記は，「われわれは新年を悲観的見通しのもとに迎えている。当産業が発展するという展望はほとんどなく，多数の失業者がでそうである。すでにこの3ヵ月間に60名が（失業者）リストに加わり，組合員失業者は500名以上になっている」(46)と述べた。さらに，80年代初期には，失業率は18%以上を記録している。黄金時代がいかに高い失業率をもって終幕を迎えたかがわかるであろう。

〔表1：2〕フリントガラス製造工の失業率

年	年間平均失業率
1853—54	10.5
1855—59	12.7
1860—64	9.8
1865—69	8.9
1870—74	8.5
1875—79	15.0
1880—81	18.2

(資料) *Flint Glass Makers Magazine*, vol. I—vol. XI の*Quarterly Report* (1853年から1881年まで) に報告されている失業保険受給者名簿より算出。
1) 算出方法は，付表Bをみよ。

では，このようなガラス産業の発展のなかで，雇用構造はどのように変化したのだろうか。まずはじめに，フリントガラス製造工をもふくめた，全ガラス産業労働者数についてみることにしよう。1851年から81年にかけての30年間に，ガラス産業の労働者の全国総数は10,238名から23,295名へと

注(43) *Flint Glass Makers Magazine*, vol. VIII, p. 935.
(44) *Brierley Hill Advertiser*, March 22 1879.
(45) *Factory Inspectors' Report ending October 31 1880*, 1881 (P. P. XXIII), p. 6.
(46) *Flint Glass Makers Magazine*, vol. IX, p. 736.

2倍以上に増加している。[47] その30年間のすべての10年間が絶えず雇用の増加を示しているけれども，そのなかで71年から81年までの10年間の増加率は9.4%ときわめて小さい。この数値は，19世紀のいかなる10年間の増加率よりも小さく，[48] 70年代の不況の深刻さを端的に示している。ところで，51年と81年のあいだに，ガラス産業における雇用の増加は，イングランドとスコットランドのすべての地域で記録されたが，その増加率には地域的偏差があり，したがって，各地域の全国ガラス産業雇用総数に占める比重は変化している。第1：3表が示すように，西ミッドランド地方では，全国ガラス産業労働者総数に占める割合は，1851年の28.9%から81年の21.4%へと減少し，また，Newcastle地方でも，同じ期間に，その割合は20.0%から13.8%へと減少している。London と Bristol も同じ運命をたどった。一方，これらの地域とは対照的に，ランカシャーとヨークシャーでは顕著な雇用の増

〔表1：3〕　全ガラス産業およびフリントガラス産業の雇用者数の地域的分布

(1851—81年)

年	1851年		1861年		1871年		1881年	
地域	ガラス総計	フリントガラス(1852年)	ガラス総計	フリントガラス	ガラス総計	フリントガラス	ガラス総計	フリントガラス
West Midlands	28.9%	39.6%	27.0%	41.3%	21.0%	39.2%	21.4%	40.9%
Newcastle area	20.0	9.4	18.8	7.5	17.4	4.3	13.8	5.2
Bristol area	2.6	0.7	1.8	0.5	1.9	0.2	1.1	0.2
London	16.2	8.1	12·9	2.6	14.6	3.0	12.7	3.3
Lancashire	17.8	20.8	20.5	22.1	21.8	30.3	25.7	26.3
Yorkshine	7.2	11.9	10.2	14.3	12.0	13.4	16.7	14.6
Scotland	5.8	9.5	7.3	11.7	9.1	9.6	6.7	9.5
その他	1.5	0.0	1.5	0.0	2.2	0.0	1.9	0.0
総計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（資料）　1）全ガラス産業労働者は1851年、61年，71年，81年のセンサス統計表よりC. B. Brown, *op. cit.*, p. 77, 84, 90, によって算出されたもの。
2）フリントガラス製造工数は、*Flint Glass Makers Magazine* の *Quarterly Report* からえられる。1852年、61年、71年、81年のフリントガラス製造工友愛組合の支部別組合員数から算出したもの。上表ではアイルランドを除いて算出している。

加がみられ，とくにランカシャーでは，1871年にその割合は全地域のなかで最高値を示すようになり，その後も増加をつづけ，1881年には全国ガラス産業労働者総数の約4分の1を占めるにいたった。スコットランドでは，1850年代と60年代には雇用数の若干の増加をみたが，70年代には減少している。

このような雇用の地域的推移は，それぞれの地域のガラス産業の構造，とくに，その地域に集中するガラス産業の種類の変化の結果として説明することが可能である。1858年にシンジケートがイ

注(47)　1851年と1881年の，印刷されたセンサスの表による。厳密にいえば，この数値にはガラス製造業者（＝雇用者）もふくまれているし，51年と81年センサスでは分類の方法が若干相違している。ただし，両者ともガラス販売人はふくまれていない。

(48)　C. M. Brown, *op. cit.*, p. 90.

ングランドのほとんどすべてのプレイトガラス生産を掌握し，60年代中頃までにその生産は Birmingham の Chance Bro., St. Helens の Pilkingtons, および South Shields の Hartleys の三社に集中された。[49] 1870年以降になると Hartleys は他の二社との競争に敗北し衰退するが，このことが Newcastle 地方のガラス産業雇用の比重の低下をもたらしたのであり，一方，もっとも発展した Pilkingtons は，ランカシャーのガラス産業雇用の比重の増加を生みだしたのである。プレイトガラスのような大規模工場がこの期間に集中した地域は，大量の労働者を雇用するため，その地域のガラス産業労働者の比重を著しく増大させたのである。

では，つぎにフリントガラス製造工の地域的分布の特徴をみることにしよう。前述したように，フリントガラス産業がもっとも集中するようになったのはミッドランドであるが，第1：3表が示すように，そこにはフリントガラス製造工の全国総数の約40%が集中しており，1852年から81年にかけて，その高い比率にほとんど変化はない。一方，Newcastle 地方では事情は異なり，1852年にはその比率は9.4%にすぎず，しかもその後減少をつづけ，81年には5.2%となった。これと同じ衰退傾向は，London でも，ヨリ小さな程度では Bristol でもみられる。これと反対に，ランカシャーとヨークシャーではフリントガラス製造工の比率は比較的高く，1852年にはそれぞれ 20.8% と 11.9%を占めていた。いずれの地域もその後増加する傾向にあったが，とくにランカシャーではその比率は1852年の20.8%から71年の30.3%へと急増している。これは Manchester における当該期間のフリントガラス生産の急速度の成長によるものである。なお，ランカシャーの比率は1881年には26.3%へと減少を示しているが，これは，急速に拡張してきた Manchester のフリントガラス産業が，他の地域より強く70年代後半の不況の影響をうけた結果である。スコットランドの状況は独特である。そこではフリントガラス製造工の全国総数に占める割合はけっして大きくないが，この期間をつうじ約10%と安定的な率を示している。

Newcastle地方の pressed ガラスが，1850年以降の新しい特徴の一つであることはすでに指摘したが，このガラスの製法は，1820年代にアメリカで発明され，[50] 間もなくイングランドに入り，導入初期にはほとんどがミッドランドで製造されていた。[51] だが，それは伝統的技術に依存するミッド

注(49) このシンジケートは，「ただちに，当時稼動していた7工場のうち2工場を閉鎖して，支出を縮少し，生産を制限しつづけた。St. Helensの2つのガラス工場と，Ravenheadの1つの工場と South Shields の Swinburne の工場が，稼動しつづけた。」(G. B. Hodgson, *op. cit.*, p. 364. および *The Victoria History of the County*, Durham, vol. II, 1907, p. 310.)

(50) George S. and Helen MacKearin, *American Glass*, New York, 1941, p. 334. および L. W. Watkins, *American Glass and Glass Making*, 1950, p. 65. 最初の pressed ガラスの特許は，1825年9月9日にPittsburgh の J. P. Bakewell and Co. によって取得された。(MacKearin, *ibid.*, p. 334.)

(51) 1832年に Stourbridge の Richardson 工場がフリントガラスをプレスする機械をイングランドにはじめて導入した。間もなく Birmingham の Rice Harris と Bacchus and Green, Dudley の Thomas Hawkes や Stourbridge の Sheely and Davis がこれにつづいた。1849年に開催された Birmingham 展覧会では，Rice Harris, Bacchus, および Lloyd and Summerfields が pressed ガラスを展示している。(Hugh Wakefield, *Nineteenth Century British Glass*, 1961, p. 59.) また，1851年の大博覧会では，Rice Harris が pressed

ランドの熟練ガラス製造工の反対にあい[52]，そこの pressed ガラス製造業者はこれ以上その生産を継続することに困難があると判断して生産を中心し，その結果，pressed ガラスはガラス産業が衰退しつつある Newcastle 地方に活路をみいだしたのである。pressed ガラスはほとんどあるいはまったく鉛をふくまない故，光沢はないがきわめて安価に製造することができた。それに加えて，デザインは単純で，機械による大量生産が可能であったので，blown ガラスよりも生産性ははるかに高かった[53]。ふつうの消費者の眼には，pressed ガラスは blown フリントガラスとほとんど区別がつかなかったので，こうした諸要因は，当然の結果として，鉄道網の拡大にともない急速に市場を拡大し，ミッドランドでも販売されるようになった。Newcastle 地方の Gateshead の Sowerby's Ellison Flint Glas Worksは，この pressed ガラス製法を採用し大成功をおさめたが，その会社の当事者が1860年代中頃に証言したように，成功の原因の一つは，「blown ガラスの製造業者が強く束縛されていた，熟練ガラス製造工の団結から，pressed ガラスの製造業者はきわめて自由である[54]」からであった。Newcastleの衰退しつつある blown ガラス産業にとり，pressed ガラスはまさに起死回生であった[55]。こうして，1865年に Ellison Works は450名を雇用し，「全国の pressed フリントガラスのなかで最大の製造業者[56]」となり，1880年初めまでに700名から1000名を雇用する「世界最大の pressed ガラス工場[57]」にまで発展した。1868年には Geo. Davidson & Co. も Gateshead にpressed ガラス工場を設立し[58]，Gateshead が pressed ガラス生産の中心地となるのである。もちろん，blown フリントガラス製造工は，pressed ガラスの生産拡大を，自らの熟練を無効なものとし，特権的地位を切り崩すものと感じ，ミッドランドでは友愛組合が製造業者とともに pressed ガラスに反対するのであるが，この点については，他の章で述べることにしよう。

最後に，フリントガラス産業の工場規模について検討しよう。Newcastle の pressed ガラス工場が大規模であったのと対照的に，blown フリントガラス工場は小規模であった。全国的統計としては，フリントガラス製造工友愛組合が1857年に各支部から報告を求めておこなった調査が唯一の

ガラスを展示した唯一の企業である。(H. J. Powell, *op. cit.*, pp. 160-1.)

注(52) じじつ，1848年に Birmingham のフリントガラス工場で生じた大ストライキは，プレス機械の導入が原因であった。このストライキについては，後述。

(53) たとえば，1860年代初めに，「ある工場は以前は年間35万重量ポンドの blown フリントガラスを生産していたのが，いまでは300万500重量ポンドの pressed ガラスを製造している。」(R. W. Swinburne, *op. cit.*, p. 201.)

(54) *Children's Employment Commission*, 4th Report, 1865, (p. p. XX), p. 182, Q. 19.

(55) R. W. Swinburne は，1863年にNewcastle で開催された社会科学協会 Social Science Association で報告したなかで，つぎのように述べた。「blown フリントガラスの製造は，この近隣（Tyne 河岸付近）では50%減少したが，pressed ガラスの製造は最近この地方できわめて活潑であり，成功をおさめている。」(R. W. Swinburne, *op. cit.*, p. 201.)

(56) *Children's Employment Commission*, 1865, *op. cit.*, p. 182, Q. 19. 引用されているのは，Ellison Works のパートナーの Nevilleの言明。

(57) *Newcastle Chronicle*, October 21 1882.

(58) *Newcastle and District ; An Epitome of Results and Manual of Commerce*, 1889, p. 169. および L. Fraser, *Pressed Glass—A Short History of Geo. Davidson & Co. Ltd., 1867-1948*, Newcastle, 1948, p. 1.

ものである。それによると，23支部のうち回答のあった12支部では，42の工場が1,244名のフリントガラス製造工を雇用していた。この数字は，組織された組合員に限定されてはおらず，じっさいに雇用されていたものの総数であるが，しかし，Taker-in とよばれた児童ガラス製造工はふくまれていない。第1：4表が示すように，一工場当りの平均規模は，Manchester を除けば，50名以

〔表1：4〕フリントガラス工場数と製造工数（1857年）

地　　域	フリントガラス工場数	フリントガラス製造工雇用数	一工場当り平均雇用数
Stourbridge	11	311 名	28.3 名
Birmingham	10	305	35.0
Manchester	2	197	98.5
Newcastle	7	178	25.4
Edinburgh	2	52	26.0
Dudley	3	52	17.3
Rotherham	1	47	47.0
Warrington	2	43	21.5
Longport	1	24	24.0
Dublin	1	16	16.0
Worsbrodale	1	10	10.0
Bristol	1	9	9.0
総　計	42	1,244	29.6

（資料）フリントガラス製造工友愛組合により，1857年におこなわれた全国調査統計より算出。調査統計は*Flint Glass Makers Magazine*, vol. III, p. 248 に収録。
1）Taker-in は表の数値にふくまれていない。

下であり，平均約30名である。Birmingham では10工場に305名の製造工が雇用され，平均35名，Stourbridge では11工場に311名が雇用され，平均 28.3 名となっている。1851年の *Birmingham Mercury* は，ブリテンのフリントガラス製造工の総数は約1,000名で，「200名から300名のガラス製造工，および，それと同数のガラス研磨工が Birmingham で雇用されている」[59]と推計している。1850年の *Morning Chronicle* もまた，「Birminghamのフリントガラス製造業は，約210名のガラス製造工，および，それと同数のガラス研磨工を雇用している」[60]と推計している。1850年頃の Birmingham には10のフリントガラス工場があったので，ガラス製造工と研磨工が同一工場で働いていたと仮定すれば，一工場の平均規模は，ガラス製造工が20名から30名，研磨工もほぼ同数であったとみてよいだろう。Stourbridge にかんしては，多少とも正確な数字がえられる。1861年のセンサス個票の集計結果は，Stourbridgeには389名のフリントガラス製造工と432名のガラス研磨工，さらに27名のガラス彫刻師がいたことを示している。その他に，teaser や packer のような

注(59) *Birmingham Mercury*, May 17 1851.
(60) *Morning Chronicle*, December 23 1850.

ガラス産業に従事するその他の労働者が164名いる。その当時，Stourbridgeには11のガラス工場があったので，平均規模はガラス製造で約35名，ガラス研磨で約40名と推計される。[61] 1861年のその地域の6つの工場の雇用数は，第1：5表に示されている。この数値は，同じくセンサス個票からえ

〔表1：5〕Stourbridge における6工場のガラス製造工数（1861年）

フリントガラス製造業者名	男子	少年	婦人	総計
William Walker	74名	24名		98名
John Davis	69	16	9	94
William Richardson	70	16	6	92
John Renald	51	25		76
Frederic Stuart	50	13	9	72
Edward Webb	30	8		38

（資料） *Census Enumerators' Books of 1861*, Stourbridge.
1）Stourbridge のすべてのガラス製造業者を表わしているのではない。

られたものであり，製造工と研磨工の合計数を示している。センサス個票には，本来，被雇用者数を記入する欄はないけれども，表中の数字は，センサス記入者が各製造業者の家族調査の欄外に偶然記入したものであり，正確度は高いとみてよい。いずれにせよ，工場規模は製造工と研磨工等を合計して，100名以下であったとみてよいであろう。[62]

ただし，この表にはふくまれていない，'cribs men' が存在していたことに注意しなければならない。'cribs'とは，親方自身が働き，家族労働力を使用したり，せいぜい数名を雇用している，きわめて小規模なガラス"工場"のことであり，そこでは，小さなポットで，安価な原料と cullet とよばれる砕いた使用済ガラスとを大量に混ぜて（あるところではculletのみ使用して），再溶解し，劣悪な質の製品を造っていた。[63] 'cribs' と一般工場とのあいだにはなんらの生産工程の関連もなく，'cribs'の製品は，工場労働ではなく，家内労働の研磨工にまわされたが，かれらは "cribs' の親方からグラインダーを提供された。[64] 1845年のガラス税撤廃以前にも，'cribs'は税の徴収を逃れるために路地裏など人目につかない場所に存在していたが，税の撤廃直後'cribs'は急増した。[65] 1860年代に Birmingham には6つほどの 'cribs' があり，[66] London には50ほどあったといわれている。[67] 児童雇用調査

注(61) 詳しくは付表Aをみよ。
(62) Eric Hopkins は Stourbridge の一工場当りの「ガラス労働者数は大略130名以下であったにちがいない」と推計し，「19世紀をとうして労働単位の規模に大きな変化はなく，1914年のガラス工場は，基本的には1815年の規模と同じであった」と指摘している。(Eric Hopkins, Changes in the Scale of the Industrial Unit in Stourbridge & District 1815-1914, in *West Midland Studies*, vol. 8, 1976, p. 32.)
(63) 'cribs' では質よりも量が要求され，「低質なありふれた種類のフリントガラスや，薬味ビン，インクスタンド，薬ビン，香料ビンその他の小ビン類のような，安価な雑貨品がつくられている。」(*Children's Employment Commission*, 1865, *op. cit.*, p. 234, Q. 124.)
(64) D. R. Guttery, *op. cit.*, p. 135.
(65) *The Victoria History of the County*, Stafford, vol. II, 1967, p. 228.
(66) *Children's Employment Commisson*, 1865, *op. cit.*, p. 231, Q. 101.
(67) *Ibid.*, p. 234, Q. 124.

委員会は，1865年にLondon の 'cribs'についてつぎのように報告している。

「これらの場所のなかの数ケ所は，2，3名の成人と1，2名の少年を雇っているだけである。多くは半ダース以下の成人と3，4名以下の少年を雇っているが，これがだいたい平均の規模である。若干はこの数の2倍またはそれ以上を雇用しており，また若干は工場 manufactory の性質に近いものもある。……それらは貧民階級の黄燐マッチ工場によく似ている。資本はほとんど必要とされない。原料は破損ガラスを溶かしてえられ，炉はひじょうに小さい。」(68)

じじつ，'cribs' の分布は，London では the Borough, Lambeth, White Chapel, および Shoreditch のような貧民居住地域と対応していた。このような 'cribs' の数の推移を示す統計はもちろんないけれども，19世紀の第3・四半期にその数が増加したということは，ありそうなことである。1877年に，フリントガラス製造工友愛組合の書記の W. H. Packwood は，製造業者協会との合同会議で，つぎのように主張しているからである。「cribsの増加はわれわれ双方にとって，すなわち組合にとってもあなたがたにとっても，きわめて重要である。われわれの組合は，cribs に共感をもっていないし，われわれはできるだけその拡張を防止することが，われわれ相互の利益であると考えている。雇用者側は，cribs への cullet の供給をやめるべきであろう。そうすれば，ホテルや他の場所から充分な量の破損されたガラスを（cribsの人々が）えることは不可能になるだろう。」(69)

通常の工場で働くフリントガラス製造工は'cribs' と敵対関係にあり，雇用者と共同で'cribs'対策を錬っていたことがわかる。熟練フリントガラス製造工にとっては，pressedガラスと同様に，'cribs' の製品も劣悪の質のものであり，市場から排除すべきものと考えられたのである。たしかに，フリントガラス産業は，通常の工場と'cribs' という二重の構造をもっていた。だが，通常の工場でさえも規模は100名以下という程度のものであり，しばしばガラス工場は glass-house とよばれていたのである。この小規模性がフリントガラス製造工の伝統的職人意識を存続させる基盤となり，労働貴族的意識を形成する基礎的条件となったことはいうまでもない。もちろん工場の小規模性が直接的に労働貴族意識を創出したのではない。労働貴族の形成にかんしては工場内でのヒエラルキーの形成，他のガラス産業労働者との相対的関係，地域社会での相対的位置関係といった，多数の媒介要因が考察されねばならないが，これは次章以降の課題である。（続）

注(68) *Ibid.*, p. 234, Q. 124-5.

(69) *Flint Glass Makers Magazine*, vol. IX, p. 241. この合同会議の開催は，1877年10月12日。

〔付表A〕 Stourbridge におけるガラス労働者数と製造業者数（1861年）

	Stourbridge	Wollaston	Upper Swinford	Amblecote	Wordsley	Brierley Hill	総計
ガラス製造工	47	31	23	107	135	46	389
ガラス研磨工	54	74	12	98	166	28	432
ガラス彫刻師	4	1	0	6	12	4	27
ガラス産業の他の労働者	9	11	9	55	47	33	164
ガラス製造業者	1	0	7	5	6	1	20
総計	115	117	51	271	366	112	1,032
家屋数	1,800	418	570	530	—	—	—
人口	8,783	2,041	2,749	2,613	—	—	—
人口100名当りのガラス労働者と製造業者	1.31	5.73	1.86	10.37	—	—	—

〔Stourbridge の 1861年センサス個票について〕

"Stourbridge" は三つの異なった広さの地域を意味している。最も広い地域としての，すなわち 'District or Union'としての Stourbridge (1861年の Census Enumerators' Books では no. 383) は，三つの Sub-district をふくむ。すなわち，1) Halesowen, 2) Stourbridge および，3) Kingswinford である。その Sub-district としての Stourbridge は，六つの Parish または Township をふくむ。すなわち，1) Stourbridge Town, 2) Lye, 3) Wollaston, 4) Wollescote, 5) Upper Swinford, および 6) Amblecateである。わたくしの研究で1861年の Stourbridge のセンサス個票を使用するばあいには，Stuorbridge Town, Wolleston, Upper Swinford, Amblecote (no. 383 : 2065, 2066, 2068), および Wordsley, Brierley Hill (no. 383 : 2069—2074) を意味し，したがって，Sub-district としての Stourbridge からは，Wollescote と Lye が除かれている。これは，この両地域には，ガラス労働者がほとんど居住していなかったからである。その代り，多数のガラス労働者が居住していた Wordsley と Brierley Hill を加えている。かくしてえられたのが，付表Bであり，これら六つの地域のセンサスは，いわゆる Stourbridge ガラス産業に従事する労働者のほとんど全員を把えているとみてよい。なお，Eric Hopkins の数値は，1851年に Stourbridge に409名のガラス労働者がいたことをセンサスから算出したものだが，これは Sub-district としての Stourbridge に限定されている。(Eric Hopkins, Working Conditions in Victorian Stourbridge, in *International Review of Social History*, vol. XIX, 1974, p. 403.)それ故，Hopkins の数値を，わたくしの1861年のものと比較するためには，わたくしの地域も同じく Sub-district に限定しなければならないが，その結果は，61年にガラス労働者は541名となる。つまり，1851年から61年にかけて Sub-district としての Stourbridge においては，ガラス労働者は409名から541名に増加していることになる。

付表Aによると，1861年には，1032名のガラス産業労働者と製造業者のうち，366名（35.5%）が Wordsley に，271名（26.3%）が Amblecote に住んでおり，隣接した両地域に61.8%が集中していたことがわかる。Stourbridge Town と Upper Swinford は，それぞれ11.7%と4.9%にすぎない。これはガラス工場がtownの外に位置してからである。

〔付表B〕　フリントガラス製造工の失業率
(1853—1881年)

年	組合員数	失業数	失業率
1853	939	54	5.8%
54	1020	68	6.7
55	912	191	20.9
56	1057	152	14.4
57	1174	71	6.0
58	1270	161	12.7
59	1318	123	9.3
1860	1300	84	6.5
61	1369	193	14.1
62	1364	187	13.7
63	1452	120	8.3
64	1545	114	7.4
65	1612	115	7.1
66	1640	90	5.5
67	1719	164	9.5
68	1668	173	10.5
69	1721	204	11.9
1870	1762	183	10.4
71	1799	147	8.2
72	1840	118	6.4
73	1875	139	7.4
74	1933	192	9.9
75	1994	126	6.3
76	2030	124	6.1
77	2088	255	12.2
78	2043	491	24.0
79	2026	534	26.4
1880	1977	450	22.8
81	1937	258	13.3

〔失業統計について〕

失業の数値は，フリントガラス製造工友愛組合の毎年の第三期 *Quarterly Report*（6月，7月，8月分）の失業保険受給者名簿より作成した。その Reportは *Flint Glass Makers Magazine*, vol. I—vol. XI に載っている。

1）6月から8月までの3カ月間に，友愛組合から失業保険を1週間以上受給したガラス製造工は，受給期間に関係なく，その年の失業者とみなされている。

2）組合員数は，同じく第三期*Quarterly Report* による数値である。

（経済学部助教授）